



同志社人物誌 (25)

大西 祝

笠 原 芳 光

大西祝は一八六四年（元治元年）八月七日に生まれた。一八六四年といえば、日本では明治改元の四年前であり、明治維新前夜の騒然たる空気がみなぎっていた。長州、土佐の討幕の志士と幕府方の新撰組が争った池田屋騒動はこの年の六月であり、英・仏・米・蘭の四国艦隊が下関を攻撃したのが八月であった。

ヨーロッパではマルクスの指導下に第一イ

ンターナショナルが九月に結成され、労働者の国際的団結がはかられた。アメリカではリンカーンが十一月に大統領に再選されたが、翌年に暗殺されることになる。日本においては近代の、そして欧米においては二十世紀の胎動がはげしくなった時代といえよう。

大西の生まれた土地はのちの岡山市西田町である。大西の号は操山であるが、これは、この故郷岡山の東にある操山に因んだとい

う。父は岡山藩の藩士木全正修で、祖先は美濃国の出身、甲州流の軍学を伝えた家の九代目の当主であった。母は岡山藩の京都留守居役大西定静の次女嘉代であり、祝はこの母方を継いだことになる。三人兄弟の末弟で、二人の兄はのちにそれぞれ陸海軍の軍人となった。しかし、祝は幼少時代から温和な性格であった。のち早稲田において彼の薰陶をうけた綱島梁川が、「文学博士大西祝先生略伝」を書いていいるが、そのなかにつぎのような一節がある。

「先生幼にして寡黙温良、寧ろ俗に謂ふおっとりしたる方なりき。先生の性質の温良なりしは、母君が嘗て屢々人に語りて『祝は従順にして能く両親の命に従ひ、且つ健全にして大病に罹りしことなく、誠に育て易き子なりき』と言はれしにて知るべし。性、喧騒を好まず、群児嬉戯の中にありて、独り静かに書を繙くことを樂しむとせり。」

＊

祝は六歳で岡山の西中山下の又新小学校に入学した。同時に祖母の弟にあたる松村焜の教える松村家塾にかよい、『小学』、『孝経』、『日本外史』などを修めた。

その頃、正確にいえば一八七五年（明治八年）四月、岡山の藩士で篤学の奇人といわれる中川横太郎がアメリカン・ボードというキリスト教の伝道団体から派遣された宣教師で、また医師でもあったワラス・テイラーを神戸から招いてキリスト教の講演会を開いた。これは岡山にプロテスタンチズムが紹介される最初であった。さらに一八七七年（明治十年）の三月に、テイラーは当時、同志社の神学科の学生であった金森通倫をとまなべて伝道をおこなった。

その夏、金森はふたたび岡山にきて、大西家の離座敷に寄寓し、そこを伝道の拠点としていた。この年に母嘉代の兄大西定道が西南の役で戦死したので、祝は大西家の養子となった。この頃、大西家では祝の祖母秀が進取の気象に富んだ女性であったためか、いち早くキリスト教に入信し、秀の次女にあたる嘉代、四女絹をはじめ親族があいついでキリスト者になった。この嘉代、絹の姉妹は率先して、病人、貧者の家庭を訪問し、慰問や看護をしながら、伝道の働きをするほどの熱心であった。

*

このような家庭の空気に祝も影響され、その年の九月に京都の同志社英学校の正課に入塾する。当時の同志社は開校まもない頃で、新島襄を校長として、ジェローム・デビス、ドワイト・ホイットニー・ラーネッド、テイラーなどのすぐれた学者が講義をし、とくに語学力をつけさせるために、ほとんど英語で授業がおこなわれていた。しかし大西はすぐれた資質にくわえる勤勉によって、たちまち首席になった。

とくに数学、論理学、文学にすぐれており正課五年生のときから、当時余科とよばれた神学科在学中にわたって、正課二年の生徒に数学を教えていたほどである。無口で勉強に關係のない話には応じないので、「応神天皇」という渾名がつけられたり、まじめそのものの性格から、名前の「はじめ」をもじって、「大西まじめ」と呼ばれたりした。

その頃の学生にはのちに歌人となった池袋清風がいて、大西に和歌を教えた。池袋清風はすで江戸時代の歌人香川景樹（かぎ）に始まる桂園派の和歌を西欧文学の新しい感覚によって再吟味しようとしていたが、大西の歌にも、その傾向があらわれている。

ロングフェロー作イヴァンデリンを讀みてミシシッピの河のしま陰にイヴァンデリンの舟かかりし居て年頃たつぬるガブリエルと行違ふところに至りて棹さしてすきゆく舟を心あらはつなきととめよ青柳の糸

その頃は西洋文学の翻訳がすこしずつ始まったばかりで、ロングフェローのような同時代のアメリカの叙事詩などは紹介もされていない時代であった。のちに大西は明治時代の短詩型文学に小さな位置を占める程度の作品を残す。その開花が十代の少年時に早くも始っていたのである。

同志社在学中、大西がもつとも大きな感化をうけたのは山崎為徳（たけのり）である。ひじょうな英才で、神学を学ぶかたわら、化学、数学、文学などを教え、同志社の学問的水準をおおいに高めたが、一八八一年（明治十四年）、わずか二十六歳で病没した。大西も早逝であるが、山崎はさらに若死であった。この山崎は大西をきわめて高く評価し、死に際して新島襄にその旨を伝えたという話が残っている。さきにあげた綱島梁川の大西伝にはこう書かれている。

「山崎氏の逝かんとするや、新島総長、氏に諮ふに、将来同志社を負ふて立つべきは何なるかを以てす。氏応へて曰はく、大西等をこそ育てて之れを任ずべきなれと。先生が當時、望を嘱せられたるの厚き、以て想見すべし。」

文中、「先生」とあるのは大西のことである。大西がたんなる秀才ではなく、人格識見ともにすぐれていたことが、この逸話からも察せられる。一八八一年（明治十四年）に同志社英学校正課をおえた大西は、つづいて余科とよばれた神学科に入学し、一八八四年（明治十七年）に卒業する。

*

この年の秋、上京し、翌一八八五年（明治十八年）一月に第一高等学校の前身である東京大学予備門の入学試験を受け、最上級である第一級にたく編入を許可された。これは前例のない措置であった。編入試験の第一日の英語の試験で、「ミルトンの『パラダイス・ロスト』を読んだことがあるか」と訊ねられて、「暗記している」と答え、一章、二章、三章と滔々と暗誦するので、試験官は「もういい」とかぶとを脱いだという。そのため他

の試験は免除され、朝鮮の地図を描かされただけで、及第となった。

予備門は一年足らずの在学中で、同年九月に東京大学の文科大学に入り、哲学を修め、毎年特待生であった。この間、もっとも感化をうけた教授は文学、哲学、芸術に通じた外山正一である。一八八九年（明治二十二年）に大学を卒業し、ただちに大学院に入って倫理学を専攻した。その間の業績が有名な「良心起源論」である。これは大学院の卒業論文として書かれたものだが、その提出は見合わせられたという。その理由は評論家木村毅によると、当時ドイツから帰朝した東京大学教授井上哲次郎が大西の学才を嫉視したためということである。

そのため大西は論文によって博士にならずのちに一八九九年（明治三十三年）七月、博士会の推薦によって文学博士になったのである。井上が国家的立場に立つ御用哲学者であったのに対して、大西はきわめて批判的であった。両者の相違のちに教育勅語問題をめぐって、一八九三年（明治二十六年）に大西の井上批判が発表されることで明白になる。

大西は一八九一年（明治二十四年）九月から

早稲田大学の前身、東京専門学校に教鞭をとることになった。その事情は本来なら、学識からいって当然、東京大学の講師となるべきところ、井上が「キリスト教の信仰を捨てれば、東大に残す」といったのを、大西が拒絶したという話が伝えられている。真疑は確かめられないが、このエピソードは大西の気骨とともに、キリスト教が国家にとって決して安全な思想ではなかった明治前期の状況を描きだしている。

*

早稲田における大西の活動は目ざましかった。論理学、心理学、倫理学、美学、西洋哲学史にわたる講義をおこない、それらの講義の内容はのちに全集の各巻を形成する確固たるものであった。当時の早稲田は文学科の草創期で、英文学者坪内逍遙が中心人物として活躍しており、『早稲田文学』が創刊された頃であった。新進の哲学者として大西祝を迎えた早稲田には活気がみなぎった。坪内は「大西祝」という文章のなかで、つぎのような評価をあたえている。

「彼の学問に対する熱心、徹底的に理解させねば止まないという教師としての親切、教授

案の周到な準備、其豊富な、適切な興味多き引例や比喩、明快な説明、爽かな、流暢な弁舌が、早稲田の文科を際立て引締め骨を作った。」

早稲田にとって、坪内逍遙は父、大西祝は母といわれるのも誇張ではない。その薰陶によつて、金子筑水、島村抱月、綱島梁川、河貫一、五十嵐力のような学者・文人がつぎつぎにあらわれた。大西は一八九八年（明治三十一年）二月まで早稲田に在職するが、その間、一八八〇年（明治十三年）に創刊された、キリスト教を基調とした進歩主義を主張する『六合雜誌』の編集を担当し、みずからおおくの評論を書いた。

一八九三年（明治二十六年）九月、大西は松井幾子と結婚した。きまじめな大西はカントのように生涯独身で通すとおもわれていたらしく友人たちはこの結婚におどろいたという。そして幾子との間に、道子、定彦、安子の三子が生まれる。一八九七年（明治三十年）一月には横井時雄、姉崎正治、雀部顕宜、岸本能武太の四人と現時の倫理思想問題について懇談会をつくり、丁酉の年に因んで、丁酉懇談会と名づけ、のち丁酉倫理会と改名し

た。

*

一八九八年（明治三十一年）二月に哲学研究のため、ドイツ留学を命ぜられた。ドイツのイエーナ大学に六カ月間学び、新カント派のリープマンや新理想主義のオイケンと親しく交わり、ライプツヒに転じて、心理学のヴントや美学のフォルケルトの教えをうけた。留学の間、大西は哲学を中心にした勉強のかたわら、ミュンヘンの美術館やウィーンの音楽堂やローマの遺跡を訪れ、芸術的興味を満足させた。しかし、その間、盲腸炎やインフルエンザをわずらい、さらに肺炎になり神経衰弱症にかかるなど、慣れない風土と家庭への仕送りのための質素な生活によつて、健康を害し、帰国の途についた。

一八九九年（明治三十二年）九月に神戸に着き、東京、鎌倉で病を養った。同年十一月には羅馬字日本語書方取調委員を命ぜられ一九〇〇年（明治三十三年）三月には、京都大学の理工科大学に教育学の講師として招かれた。いずれ京大に文科大学を創設して、哲学科の中心となるべく嘱されていたのであるが、それは、実現しなかった。大西の死後、

西田幾多郎が京大にきて、京都学派を確立したが、もし大西が存命していたら、西田哲学とは異つた自由な市民的哲学を樹立したであらうとおもわれる。

十月、徹底的に健康を回復するために、郷里岡山に帰り、その号の由来する操山の西麓で秋のひとつときを楽しんだ。しかし、激烈な腹膜炎をおこし、十一月二日の朝亡くなった。夫人が遺言を求めると、従容として、「いづれ人は一度は死ぬるものなれば、此の期に及びてまたいふべきなし。唯だ天、今年を仮して吾が使命の一分を遂げしめざりしを遺憾とす」といったという。享年わずか三十六歳三カ月であつた。

日本組合岡山基督教会における盛大な葬儀ののち、妙林寺の墓所に葬ったが、のちに移して、現在墓は操山の西南にある小高い平井山にある。

（付記） 本稿は来春、同志社大学生協出版部から発行予定の『統同志社の思想家たち』に収録される「大西祝——批評の先駆の伝記的部分の要約である。

（附29大神院卒・大学宗教主事）